

名をかくすことと明らかにすること ——情報社会における「名前」のメディア論的考察

岩瀬 祥瑚（明治大学大学院）

発表要旨：本発表では、「名前」を「かくす」行為について検討し、「名前」を「かくす」ことの意味を整理したうえで、現代情報社会における「匿名／顕名」状態について考察する。

W・オングによれば、声の文化のなかで生きる人々は、名前は「ものに力を吹き込む」ものだと考え、「名前によって、人は、自分が名づけるものを支配する力をもつ」という信念を持っているという。実際に、名を明かしたり名を呼ばれた際に返事をしたりすることで呪いをかけられてしまうというモチーフの物語は数多く存在する。声文化の中では名前は、呪術的な意味合いを持つものであった。他方で手書き文字や印刷革命以後の活字文化の中で生きる人々は、名前を「レッテルのように考える」傾向があるという。オングの議論からは、声文化から活字文化への移行に伴い、「名前」がもつ呪術性が薄れ、「識別子」としての側面が強まっていったことが見てとれる。

また、近代国家の成立以後の「名前」は、共同体的権力とのかかわりで論じられることが多い。例えば田中（1996）によれば、現代において何かに「名をつける」という行為は特定の言語共同体への帰属を表しており、近代国家的権力に関わる。また、出口（1995）は、「実名」が特定個人を指し示す「固有名」化することで「ほかならぬこの私」を意味するものになり、実質的には権力による管理のための記号でしかない「実名」が主体性の根拠として扱われているという。以上のように、名前を「識別子」として扱うことは国家をはじめとする権力に関わる問題として位置づけられてきた。

現代社会におけるコミュニケーションは、インターネットのイメージから「匿名」中心と考えられてはいるが、実際には「匿名」が徹底されているわけではない。SNS などでは、「実名」どころか素顔さえも明らかにしつつ、自らの立場を表明する人物がいる一方で、一切素性を明かさないアカウントも存在しており、「匿名／顕名」の混交状態にある。自由に設定可能なアカウント名や「名前」以上にアカウントのイメージを作ることもあるアイコンのように、単なる「識別子」ではなくなりつつあると考えられる現代的な「名前」や、国家的な権力観も変容しつつある情報社会の現状を踏まえて、名を「かくす」と「明らかにする」ことの現代的意味をメディア論の視座から考察する。

参考文献

- 田中克彦（1996）『名前と人間』、岩波書店
出口 顯（1995）『名前のアルケオロジー』、紀伊國屋書店
ショシャナ・ズボフ（2021）『監視資本主義——人類の未来を賭けた戦い』、東洋経済新報社
W・J・オング（1991）『声の文化と文字の文化』、藤原書店
マーシャル・マクルーハン（1986）『グーテンベルクの銀河系——活字人間の形成』、みすず書房